浪華俠夫傳

貳

特
へ遠13
966
2

東3
9660
巻2

木村

諸役人武士も及ばぬ者とそうふと感心し給ふ此中
介をもけて繁く見へ合ひ刑罪の日ふもなく松越良
とも後手に得て最後場迫ハ道のかと遠ざれば皆々馬ふのセ引ゆく
三人の者
馬ふのセ乗るか何とも〜たりん良介をのせる馬俄ふ跳上り
跳まはりられバ人馬ともとも地上ふ倒たりむざんなる良介ハ馬と
志ひ〜く行所ふ〜かしすや其場ふて即死したり〜ゝ警固の
者とも驚馬と分抱〜〜れをりゝ先ふ切つゝ註方ふく馬よ
死ごい拾ひ注ひ最期をよいろう各馬ふ引おろし彼野の並木と
傳うつ罪の報と讀聞ひ銭玉ふあけ〜ふ九人の者
念仏たゝふふゝめて相果ける良介も同じ罪なれ
骸を木ふいまゝめ刑を行ふ者どもは即ち死をなうと即時に

然ることゝ心みゝ先こゝ者あれで留免をもさ汝立帰つとゝかゝう亜
罪の者征罰あうゝる天の悪をゝや一天俄よゝさ曇つゝ雨ふやゝく
ちゝまゝば見物大よ驚き皆くゝ各々躰びつ逐電つとゝ其夜家
中の若者ども打寄雑談しゝるゝよ吉人云出しゝゝ八今宵の
雨も降いと恐しゝ夜なうぐゝふ刑罪あつゝ不かいさりて一人々
小扇をゝくゝさせ来るものあゝんやゝ云出しゝゝれい各向を揃へ
武士ゝる者たゝどの事をせざゝんや何ゝも御指図あれ一人
まのうゝく右のごゝく計んと息巻くゝ旬ゝう甚中ふ石堂清左衛門
明日内用まゝく他出をれで同役後藤新八よ此事頼まんと来
て此雑談を聞居ゝうゝれゝる黙してあつとゝれを各袖を打引
く嘲ゝう笑ひゝ乃出よ云出せしゝ戸並三平ゝゝうゝを聞ゝうよ

きゝくゝまゝへしゝ扨石堂氏ゝも此席ふ居合給ひ居れで最前ゝう
一云と出しゝ給ひどゝされと同しゝ席ふおゝせば聞ゝいのゝうぐゝう
以前右前書載ゝべしゝ少ひゝれを清左衛門ゝゝく成ゝど一席
ふ座居ゝゝべ色をゝくゝもゝゝくゝも同しゝくゝを我ゝゝと御深さ下さ
まゝしゝ此やと答へゝる皆くゝ合たゝゝゝる一同よ少つゝと笑ひ極く
石堂氏ゝゝ憶病なゝる事と仰らゝくゝものゝふ此座中ふあゝく此聞
ふゝづゝゝゝゝ向後武士の附合ハ出来ゝ悪しゝ夫ゝも御附合ひ
かゝゝゝ御了答よゝく聞ゝとゝぶゝ申へゝゝやゝ怒りれで夫
ハ迷惑千万我ハ後藤氏よ用事あつゝく糸つゝれを此連中ゝてへ
見なゝ独れで向後御付合下されゝゝくハ甚難渋なゝゝべ我名
ゝも御加入下ゝゝべしゝゝく六本の聞とゝ引ゝゝる字の

寵清左エ門取りまを各心よたひよ恢ひ石堂氏寵ふあること給へ
是非あり而我ゐさるべ〻ぞいひきれをいうもはよい遠分なる
陣下の扇をゐゐもちふと信元清左エ門五人の者よ向つて云ひ
ハ元ハ元あよう我と憶病をのと各思召つゝん壮年の貴ゑ方あれ
を後学のたゑよ申亜人孔子を鷺虎馮河の者ハ友とせじとゐ
ゑ弥ふ柴の事ハ何の益かに事ふく君の邦大事の時へあう人
を必後と見をものなう先よ辞退いさ〻れへ向後邦附會
あるゆ〻との事ゆへ同家中よ居ゐう附會毎くハ甚迷惑波
少ゆ陣りなう若さ人〻ハ急度向後慎給へと云捨て出行
石堂清左湯門舟我良介と助る話

斬く石堂清左湯門ハ三輪の誕夜ハくまとも昼も見へぬと云
うゆうとひ闇夜ふ灯燈さくもそびさび傘打くさ者うの刑罪の場
ゐ来くゑれを向骨耐くよ鬱くとして陰火ちさつふ変へ狐の
声物凄く雨のふやをふ刑戸をゑれへあくし併もるくいぶせさ事
いをんうさなしされと豪雄の清左湯門死殿のそはちかくをみう
扇とふふうくさせ一人〻と高声よかぞ〻九人迫くくのをとくよひ
しふ十人目の屍ゆくくと声とうみゐれを世の常のものなうへ魂も
失ひ逝ちるべさよ清左湯門自若として元先ゆう者の物とをし
物を聞を宮て狐狸の業ひの入給う我心と惑ゆとうや正物とう
んせと強元ゆ門ろげ詰うくをへ彼屍ちぐ〻〻留先全くたゆう
の者よあうへ我を田田乃良介と申浪人なうゆ人乃命よ代て

仁義

さうくのおとくの刑ゆ行はれねばと今朝馬より駈落され絶
死致しに変刑より行はるゝまも死骸あれどとく葬と泣くもさ
ぞ其上留ともさくはらしよや先刻の大雨はふ入ふし心付たる人人
の者ども申合せ禁よく刑より行はれしより我一人残うく何らせん
君豪雄と見なれば何と歎よるべ先とはし早く黄泉ゆ急しこ
び給へ嘆や九人の人〻待つらんと涙とともよ委細を物がたれど
清た湯つ大ふ驚愚く其元日の庄宦忠た湯つふ代うし義心余江
なうゝ聞傳へ感心もうゝ隠徳の陽報さもあるべき事なうゝ何と
留をはし再ひ殺さんや一旦刑より行はるれば其罪をはらべく
ぞ死と為るべしと縄をとゝ引おろし先と我家へ来るべし
と連うゝ密よ一間へ入衣服とあゝく食事なとさせ旅用の黄金迫

あさへとくゝらく汝は耳よあゝくい上の恐れ再ひ刑より行はん何國
成た急退時節の至るを待つ亟しし我此事と生涯他言を為ずけ
出で外へ洩出ん中なし必く一時も早く當地を立退べしと手
と取て引立ゝ出で良介是ぐさく涙よくはかるよ活命の恩と何
の世よ報じ難んあれ願くば御名地あゝ給へ我生涯朝夕御
武運祈ゝ奉らんと泣く云ひくはは清た湯つも涙ぐゝ其元心底
淑足ゝ我ハ石堂清た湯門といふものゝ縁もあゝ又逢事もはた
疾昭ふを悪うゝ急く早く出うく追立やてけう翌日ハ見物の群集
市とゝくゝよ九人の屍ハあゝく一人あとゝ斗ゝく死骸ゝ是兵事
あゝは天狗の業ゝいふゝんと云ひ出しくれべものゝ兵乃男ひ
火車といふものゝあゝく死骸とゝる事引くあゝ事と急く火車の仕

業なりんといひくれば各もと同会せり大事なりを撿使まつこと
考こされ見るの上をきいく先鼓の吟味をあらに問ふるくハ忠
左湧門ゞ命ふ代ゆし良介なれハ田の者ども先鼓と盗取葬しも
のなりんと思ひ名を格別ふ詮義もあるべ打過ゞ

良介盗賊ふ謀らるく話

かくて船越良介ハ不思義ふ石堂清左湧門ふ助らゆ足をと
らうふ國境を退さ上方と志のゆりゞ新ふ国防の國みく山道
ふ暗逆ひるあとさるあとたらるく物向ふ一軒の酒家あり良介
少し酒弦さのゝみ名をべ大ふ悦び立寄く酒をもふ主と思しく至
く人品よき男さ出酒をいろふ何と差上んといふふ二三合あるべ

ようふん價と問ふ甚下亜なりり此所ハ人里離るる所ふて酒あるを
價ハるるるべきふ何とそく安くん商ひ給ふ様と曷々れを聞乃
通ゆ申るの変へ逆ひ素ゝ強ふ人くの義と貪りく何角せん只施
ゆるくせんも商賣乃事あれを異心なく利をるるるべ為るる
あるとちひゝ名者良介大ふ感心して扨く尊きを世ふあるべき人ふ
人品ふ直る者ふ世ゝ名ゞくくれをあるべと深く称美すれば
主傍の男よきるつと問くべせして異を吾黨の人なくくと数編
酒ゆられを者るく酒賣男傍ふあり名数美酒とりら出酒
ハ民人ゝ東酒ふハ作べ我店井一乃名酒ふく作れと君の主
人と補兵仕ふ嫌しさに店く離ふ酒の便るくはらしなり
よくく味ふきるるる名人と苦五しゝ名れを良介を志と聞び

浮世絵天保者文庫
十九

ひとしきり礼謝しきく者をくるふ波ふ事ある見酒あり事れ出さ
折しく二三数者をくるふ勿五数嬉敷動ゆあるこ所ちハ
義と起ちんとをくるよ足あくに兵目の働くのをくるものいふ
ふちぶちハ悩し紀と愚をくるちの男戸板とうさ知ら良介
うい龍さ右屋しくふしく笛と吹ば雲つくをくる男女人あられ出此
中叔とをさ弟ひ山深く入る新良介ハ目のみ働くしくをいふ
をくる事あるいしくの両人よかき荷られ一里斗まつくんと思ふ
愛ふ石門あるを仁義の二字と書さる額あり其愛をゆつく暫
紀と思へを誠ふ結梅を撫への家あり玄寶と思しき変よ呼
をく両人ハ門へ入る暫くいるを儒医し思しく勿待らし社人
出まり何ら業球良介ハ又山をく毒茶とやあく

つらん吾ハ思しとハ思へとも作ねさふ伏られを呼吸ふつまを咽ふ入る
こい淺女しと思ふうち心身快ふくなり自然と自由ふ成ちれを
起上つくくうの醫ふ曷をくらくをも山変ハいうある所ふくを邪
ハいうなる人世最前癪茶と何の乃ふ我をあくく何のゆふ山変へ
俳ひ来てしや溜として其由縁ををうさ沢願ハ足下是と教く
給へくしはをしく是下れの事給ふハ毒酒外解を良茶あ
人是はく其来由ををうを沢何必ず詳ふ悟し給へと曷まばこの乃
醫師完示と打笑ひ足下れふ審をくふも沢なう此をを周防の山
にの山奥くく人の来る新変ふあく沢首傾を盗賊ふ会うを新推い
といふ人なうとをいふふ良介をひふふ驚さたあくべくを思ひしふ山入口
仁義といをる額をうを事しいく不審ふう何ぜく盗賊ふ仁義の心

わゝんや醫師答て云ふ我首領は仁義とのみ行いかうも此道の事となさゞる故ふ我黨ふ入んとする人を先禁じ其人物と撰で其器ふ応ずさるは疾ぐ去ると用ひゞ足下を隱德の君子なる人と尊主察しくゝの業法と用ひて此所へ送て越せーなゝん君も此所よりは供ふ仁義となし給へとゝひ給ふ良介犯も仇とする盜賊ハ世乃系仁此上やあらざる盜賊となるとゝ仁義と称ふとゝ如何医師答て此論我と足下とをぐたふあゞ首領ふ話ふ給ふ度しと入る歟

良介強盜乃仲間ふ入話

良介を忙然と首領ふいふ歟者やゝんと待居さる所ふ首領ふ今出給ふと立出る姿を見るに三十斗なる白面風眼美形いとゝうさかゝる男の黑羽二重の小袖小同しく羽織塚著茶宇の袴ふ金拵の脇差をさし刀を小姓ふもたせ立出るさま誠ふ在五の若男歟の光も耻ぶく見へ事歟首領良介ふ上座ふ賓應し懇勲ふ礼を述我へ筑紫權六と申者ゝく世ふ淺ゝ業とおしく世と渡るものゝ様ふ足下の姿と見奇なる人ゝも思ひ付ゞ包まゝ身のゝ塚御物語つ云ふ通さしく低頭して述々新良介ハ此者元人なゝゞ我身ハ隱しくハあしゝうなんと我ハ元大内家ふ仕へし浪人なるかゝゝ乃ちとゝく禁の刑ふ行ハるしふかゝる事ゝて助るとゝ云ふ登らんと云く道ふ逆ひ不思義の對面いとゝ事ゝと云ふ語りくれを皆くゝふ驚かゝ高運の人もあるものゝ我ゝ業ハ只運の強さとゝ云ふべく向後此交留ゝ我力とも為ゝ給ふ道ゝと頼とくれを良介猶も不審

志く君の容貌を見るよ中ノ〻盗賊などゝ云ふ人よあゝばいふる教ゆ
かゝる恐しき業なり後よ世やゆ権六善く御其ら先祖い新中納
言平の知盛ゝくに世く民間よ下ゆ数代九州よあるゝしよ我領
主荷政とゆし蒼生とゆし免い故数十人徒党なり所々乃
鍛へ押寄終よ打亡し跡後ゆ捕へ筑紫と立退今この山
口の奥よ盗賊といふ悪しい非道の金銀ゆ我取掠むる金銀
多く民の賄賂ととして家富し地頭或ハ代官へ押寄或ハ他乃
とゆしく貯ふる金銭ゆと集ひうう貪婪の者よ施し哀故
手下い付い者も強欲の者ハ様見いく手討よいさし隠徳あるも
のとのゝ知ゆ殺しい夫ゆ仁義の額ゆけ作時も忘申さいく
吐しの中へ一人の手下罷出仰付く出し濃村の与市兵衛とゆ者

女房の大病人参代よ娘と傾城奉公よ賣渡し其金を持夜道と急
ぎい故者悪盗の附狙ひ申候ゆもとうゆく見隠れよ宿えまて
送り届けアゆ新らち又志人罷出私ゆ厳洛の近村よ四辺ゆう
とゆ者の女房主乃娘を養いん為夜毎よ辻君よ出くゆ義ゆ
金子拾両客とゆ出し申く詠々影是と聞く良介大よ感ず
足下ゆ仁心唐土の宗江ゆふもおゆく劣ゆ後ゆ御祝ひ為ん暫
此変ゆ為ゆ君の一射と成く勧善懲悪とゆ申へしと怪ひ為
ゆ権六と拉文安堵の気色ゆて足下のゆ運ともつく出ゆぞと
給いん出ゆ為ゆ手下の者ゆを喧うし怪ひんや怪為陸面
ゆれ事ゆ聞くゆ下の者ども来ゆて周防乃岩国町よ世よいふゆ
ざいとゆ多の金銀ゆ取いりの右のとて麓ゆ出ゆ

坂者ども

ちどりはまちろ

うゆうしゝさ仕ゆハそ然の市蔵ゝを及ぶはし我ホともものうち
ようゝ系う奪ひとゝいらんと申ゝれば今宵ハ客人と夜とたるゝの
ぐゝうんや思くハ其方ども宣しゝく斗ふべしゝといひ残し良介弑
伴ひ奥深く入よゝう

板谷軍兵衛石堂清左衛門を討く立退之話

爰よ石堂清左衛門ハ去る頃永蔵良介を助帰し狂も忠勤怠
りなく勤めし耶よ先達て閉門仰つけらゝ其後退役せし板谷
軍兵衛又ゝ殿の御為と書出し帰役せんと願ひ出れども家老大
道寺玄蕃番頭石堂清左衛門両人兼知せず猶ゝ諫言して彼再
ひ出なば又ゝ百姓の一乱起ゝんと申上し事をかの聞く深く両人

を怪み城内ゝ両人をなきものふせんや ユとゝ歌此玄蕃
ふ一人の娘あり其ゝとゝ歌ふ沉奥蔵雁羞月閉花の粧ひ嘗
年十六ゝふ其ゝ名を一度垣間見し人ゝを心を動うさびといふ
事ゝし又石堂清左衛門ゝも一子ありて名を清十郎ゝゝ廿一ゝ
中一ゝ養男ゝゝいまゝ部部伯ゝ有ゝ此妻子いつの頃ゝや清十
郎と又初夫と頼まんハ石堂清十郎ゝぞハ外ふあるはしとゝ
初ゝ此ゝ家の長朝比奈義右衛門早く悟り主人大道寺玄蕃ゝ
言ゝるハ當家中廣しとゝくとも仁義の道を守り士と賞ゝ伯ゝハ
石堂清左衛門ゝ子息清十郎ゝ父の気性と変ず正直なり姫妻
子君聟君ふなり治ふとを取りしかるゝ嫌ゝ見ゝ
ゝ是ハ玄蕃も清十郎を賀ふせんと思ゝ出るゝ

我とはし清左衛門方遠縁なるべし方より娘を妻し度このよう
と語りうるに我嚴右衛門大ひに悦び幸清左衛門若黨金子右衛
と名乗入婿なりうるとバ主殿右の意を吐しるれば右衛門も
悦び當時井一の御家老より若且那と乞給ふ家の者ども一
也早速清左衛門ふ語りうるれバ清左衛門ハ犯文收ひ仁義を美
仕給ふ玄蕃屋の聲ふなりんハ清十郎ハ仕合者なりと早速故郷
熟詰よ及び大守へ願ひ結納まてハ一生一日限猶待ゝ居よ娘婦ま
ハ犯文收ひ絶へどくふよ翌よ祝言ハ日を待ゝ新此事扶谷聞出
て大ひよいう我先達て婦子を娶うんと嫌と以て云入しよ返答
も せび我よ一言の挨拶るも及バを石堂清十郎へ来ル不届しやえん
者く意根ゝ両人弥其名ゝ〜ごとしとさぬぐんハ猶數せども玄蕃

ハ大禄ふて供人あまと召連ぬとハ迎數軽ハ沒せ者く清れう親
子の門を訪く慢ゝ待ゝ居ふ其頃楠流の軍学講釈あ
つまく好の道なれど歌子ハも日く通ひ居る軍を清天のあゝ人と為中
ふ略の擬の木ふ二俣あり居る上へあゝ縄引さげて両人の坐ると結る
ふ運の意めるやあうんん清十郎ハ傳釈るくも吐し居れバ歌清左
清門斗灯燈とゞさせ先へ立ゆうの擬の木の下と伺ふく通りかゝ
所城よりう待まあけうる縄くく捲ぐるよ肩先より腹へ突とをしる
公沒ゝうとつれるゞ縄の柄と志うとくくくくくくくどろ杉しられど
のゝ ねゝ刀と抜くくくる清左ハも抜合せ暫くたくうんといでる清
ふの清左ハ志ゝくよ敵を果終ふ軍を清よ切ゝ志ゝ志ゝ孫の意結
城遂よりる灯燈持へ余くくくゝ敵百姓補へゆげ逃くうれバ軍を清

も取の根一ツ所に敵さる一ケ所手あひ[illegible]で直ふ我家へ立ちかへり
[illegible]ぢはちく路用金弐分の中ちく仮く中間庄兵衛といふ者
[illegible]ひいざ[illegible]ちうくのまゝ眠よりく拠ふく清右衛門と付く立のさ[illegible]
[illegible]んとの四ちう海よとのさなさ一反余あり何よ我くちうくふなしく
[illegible]きよりつく敵のちく[illegible]ありく金子三十あと紙[illegible]
よりつく大欲無道の庄兵衛一義もたちまちびうびゆかせうれ
[illegible]びくちく[illegible]ひ[illegible]ちく[illegible]面解ふ疵とうけさ[illegible]
[illegible]ぬ内よりとのさ[illegible]ふ[illegible]事何るも[illegible]
[illegible]ちくちく[illegible]ひやべしと志[illegible]あひく軍兵衛を何国とも
なく落行るかるこしふちく清十郎ハ清右衛門あく吸[illegible]
[illegible]ん志[illegible]ちくしく[illegible]

立帰りとりの携の木刀元近来うしふ何中ちん倒きしをのあり
灯燈さ[illegible]せ[illegible]くあれを親清右衛門なりくふくぐれと絡うさ[illegible]ん
仰轉して呼生きとちや事されくいく[illegible]ハし何そのく仕業と
心をくられを傍ふ鉄一本あり空[illegible]と足ハび扶谷軍兵衛ハ取持の縁
なれを敵を敵ハ扶谷軍兵衛なりと狂気の如くうけ過るうち灯ち
持うちうせふ若黨金子大兵衛を馳付あ人扶谷ぐやしくうけ
れとも元ちや出奏せしあしなきびせんうとかく清右衛門
うる議坊ちさいぐ我家へ帰りける

浪花佳人夫博第巻之壹尾